

卒業式・専攻科修了式 告辞

筑後川に紅白の梅が薫る早春の佳き日に、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、平成27年度久留米工業高等専門学校卒業式並びに専攻科修了式を挙げていただきますことを、卒業生・修了生はもとより、本校教職員一同、まことに光栄に存じます。高壇からではございますが、ご多用中のところ、ご来臨賜りましたご来賓の皆様には厚く御礼申し上げます。

本科卒業生・専攻科修了生の皆さん、ご卒業・ご修了おめでとうございます。久留米高専に入学後今日に至るまでの皆さんのご努力とご研鑽を讃えたいと思います。

また、卒業生・修了生の勉学をこれまで支えて来られました保護者並びにご家族の皆様にとっても、今日の日のお喜びは如何ばかりかと拝察申し上げます。皆様のご篤志に改めて敬意を表するとともに、心より御祝い申し上げます。

さて、21世紀に入り、地球環境、エネルギー、資源、人口、ICT社会変革、地域紛争等々人類は未曾有の諸課題を抱え、人類史は閉塞状況にあるかに思える一方、明るい兆しも見えています。その端的な例の1つとして、宇宙開発を挙げることができると思います。空気も、重力もなく、およそ生命維持に適さない宇宙空間で、人類の未来のために、先端技術・科学を駆使して、命懸けで、人類の生存の可能性を追求しているNASAやROSCOSMOS、JAXAのスタッフのご尽力には感服するばかりであります。とくに、欧米人以外では初めて国際宇宙ステーション（ISS）の船長を務められた若田光一さんの活躍には目を見張るものがあります。

若田さんが船長を務めることになった背景には、日本の宇宙開発技術のレベルの高さやその面での日本の経済的・人的貢献に加えて、緊急対処能力や状況把握能力、調整力など若田さんの持つ宇宙飛行士としてのずば抜けた資質があると言われていています。とくに、調整力については、若田さんは、多様なバックグラウンドを持つ宇宙飛行士たちを「忌憚なく意見を言い合い、その中から最善の道を見出す」「和」の精神（『若田光一 日本人のリーダーシップ』）でまとめ上げ、見事に船長の任務を果たされました。若田さんのご活躍は、卒業生・修了生の皆さんが受けてきた高専教育を考えるに当たっても、大いに参考になるところがあると思います。

卒業生・修了生の皆さんは、実践（実験・実習・演習）から理論（講義）へとスパイラルアップ（善循環）しながら、各専門分野を究め、創造性を養って来ました。そこで培った技術・科学に関する識見と能力は「高専スピリッツ」として、有り難いことに、企業からも、大学からも、高く評価されています。

また同時に、皆さんは、授業以外でも、課外活動や諸行事の中で、先輩・後輩、学友、そして教職員との交友をはかり、リーダーシップやコミュニケーション能力を磨いて来ました。

後は、久留米高専の学業生活の中で修得した技術・知識や様々な資質について、誇りと自信と勇気を持ち、堂々と歩いていくだけであります。

ご卒業・ご修了に際して、^{はなむけ}に次の2つの言葉を紹介したいと思います。

1つは、随筆集『甲子夜話』の著者として名高い江戸後期の肥前平戸藩主松浦静山の言葉です。松浦静山は、自らの剣術指南書『常静子剣談』の中で、

「講義等の席は、物事を学ぶ所であるから「楽屋」といえる。常日頃は、学んだものを実行する場であるから、これは舞台である。楽屋は、いろいろと準場を整える場であるから、どのようにでもやりかえる事ができる。ところが、舞台に出てからはやり直しがきかない。ここのところをよく考える

べきである。…剣術の世界でも、稽古場は楽屋であり、常日頃の生活こそ舞台であることを、よく理解、認識すべきである」

と述べています(是本信義訳『古人の教えに学ぶ 井伊直弼「茶湯一会集」 松浦静山「常静子剣談」』)。

卒業生・修了生の皆さんは、今まさに、久留米高専で学んだものを実行して行く日常の世界、やり直しのきかない日常の世界に向かって出発しようとしています。これから皆さんは、それぞれが自ら選択した舞台に上がり、活躍して行くこととなります。日常という人生の舞台での皆さんのご成功を祈らずにおられません。

しかし、その日常は、必ずしも平坦ではありません。いま一つは、日米通算4213本の安打(世界第2位の記録)の他、人並みはずれた数々の記録を打ち立てている大リーガーのイチロー選手の言葉です。イチロー選手は、今年2月、宮内義彦元オリックス会長との対談の中で、「会社経営も同じで、しんどいことばかりです。しんどいことに負けてしまえば、どんなに楽か。イチロー君はそんなときはどう乗り越えているの?」との宮内氏の質問に対して、

「日々やっていることを同じようにやるのが大切だと信じています。心から持っていくのは難しいですが、体をいつもと同じように動かせば、そのうちに心がついてくる。心が積極的になれないときのテクニックです」

と語っています(『PRESIDENT』2月15日号)。

「前人未到の記録へチャレンジする「奇跡の42歳」と称されるイチロー選手にも、心が前向きになれない時があるのか、と改めて驚かされるとともに、「体をいつもと同じように動かせば、そのうちに心がついてくる」というイチロー選手の言葉は、平常心の大切さとそれを保っていくためのヒントを私たちに教えてくれているように思えます。

卒業生・修了生の皆さん、「日常」を大切に、浮き沈みや起伏を伴うことが不可避である人生の舞台をよりよく生き抜いて行ってください。

最後に、卒業生・修了生の皆さんが、久留米高専の学業生活で修得したことを礎にして、なお一層の研鑽と精進を積み重ね、また健康に留意され、自らが選んだ進路のそれぞれの場で、日本の未来を背負うエンジニアとして活躍して行かれることを祈念し、本科第51回卒業式・専攻科第22回修了式の校長告辞といたします。

平成28年3月16日

独立行政法人 国立高等専門学校機構
久留米工業高等専門学校長
三川 譲二